

●ある詩人はイエス・キリストが 2000 年にわたって多くの人々に慕われ、救い主と信じられてきた理由は、奇跡や復活の出来事によるのではなく、その根底に「人の痛みを知る優しさ」があったからだと言っています。

イエス様は「私は柔和で謙遜な者」と言われましたが、聖書に記される「柔和」はギリシャ語で「プラユス」と言い、自らも抑圧されつつ、なお他者に寄り添い続ける優しさを表しています。日本語の「優しい」もまた「憂いを持つ人が他者を思いやる心」を含み、イエスの姿と重なります。ローマ帝国やユダヤ教体制の重圧の中で、イエスは苦しむ人々に共に涙し、励まし、「神はあなたを見捨てない」と語り続けました。その憂いに満ちた優しさこそが、人々の心に深く響き、今も世界中で信じられ続けているのです。

●今日のマタイによる福音書 11 章で、イエスは「疲れた者、重荷を負う者はわたしのもとに来なさい」と招かれました。この言葉は、律法主義や社会的不正義に苦しむ「小さき者」たちに向けられたものです。そして、「これらの事を知恵ある者や賢い者に隠して、幼子たちにお示しになりました。」という言葉は罪の意識に苛まれ、差別され虐げられている人たちこそが、救い主による自由と解放に与ることができたのだということを伝えているのです。

●ジンバブエに「内気な青年」というお話があります。この物語の中でイエス様は、「人から評価されない絵」や「割ってしまった皿」、「嘘」といった青年の弱さや失敗をそのまま受け入れ、「全ての重荷を私に持ってきてください」と招きます。これは、社会の価値観や自分自身の限界に苦しむ現代の私たちにも、共通の慰めと希望を与えるメッセージです。

●「わたしの軛を負いなさい」と言われたイエス様は、罪人とされたもの、社会からドロップアウトしたものを一段高いところから裁くような神の子・救い主ではなく、共にその人間の痛みを知り、汚れや罪を背負って「共に歩んでくださる救い主」です。そのイエス様に今週も私たちは、自らの重荷を主に委ね、歩んで参りましょう。そして、私たちの弱さや憂いもまた、誰かへの優しさとして用いられることを信じ、共に希望を持って生きていきたい。そう願います。